

# 令和6年度 発達障害児者地域生活支援モデル事業報告

令和7年2月26日

## 【事業目的】

大阪市では、平成26年度より幼児期・学齢期（低学年・高学年）、思春期と年代別にグループ編成したペアレント・トレーニング（以下「PT」と略す）を実施してきた。令和4年度は、「PT基本プラットフォーム」を応用した幼児版PTのプログラム作成とファシリテーターをスーパーバイズ（以下「SV」と略す）する手法を整えた。令和5年度は、PT参加者の発言を分析し年代別の特徴を整理するとともに、ファシリテーター養成講座を実施して、地域の事業所でPTを実施する際に必要とされるフォロー体制のニーズ調査を行った。

今年度は、PT参加者の発言内容の分析を継続し、データ数を増やすことで調査の妥当性を高めることとする。また、ファシリテーター養成講座の実施や、当センター主催PTの見学、SVを通して、地域の事業所でPTを実施するためのサポート体制を構築する。

## 1. ペアレント・トレーニングのプログラム作成に向けた調査・分析

### 【実施期間・参加者・使用するプログラム】

- ・グループ実施期間 令和5年5月10日 ～ 令和7年3月11日
- ・参加者 市内在住で、発達障がいの診断がある（疑い含む）お子さんの保護者（11グループ、合計67人）
  - 幼児期（年少～年長児）： 3グループ 18人
  - 低学年（小学1年～3年）： 3グループ 19人
  - 高学年（小学4年～6年）： 3グループ 20人
  - 中学校（中学1年～3年）： 2グループ 10人（今年度の1グループは実施中のため分析途中）
- ・プログラム内容 幼児期： 昨年度のモデル事業の成果物である「基本プラットフォーム」を応用したプログラム  
低学年・高学年・中学校： 奈良式のプログラム

### 【調査・分析方法】

- ・調査方法：事前に参加者に調査に関する説明を口頭と書面で行い、同意書に署名をもらった（71人のうち67人から同意を得た）。PTに同席するサブスタッフが、参加者の発言内容を共通の記録シートに記録した。
- ・分析方法：PTの進行に伴う個人の継時的な変化について記録データを質的データ分析すると共に、どの様な話題が出たかをライフスキルの項目（WHOと梅永雄二氏の分類を参考）を中心に分類して、各年代毎の特徴を整理した。

【各年代の特徴】

	幼児	低学年 (小1～3年)	高学年 (小4～6年)	中学校(中1～3年)
参加者の特徴	子どもと一緒に行動する機会が多く「親である私が何とかしなければ」という思いから、怒る子育てとなる傾向がある。親としての役割を上手くはたせずに挫折し、 <b>自信を喪失した状態で、焦りや危機感を抱いている。</b>	同年代の子どもが一人で行動する機会が増える中、我が子は未だ親のサポートが必要な場合が多いため、誰にも分ってもらえないという孤独感を抱きやすい。 <b>就学を機に「宿題をやらせないといけない」というプレッシャーが強まり、宿題に関する話題が多くみられた。</b> ただ、日々の生活の維持で精一杯な状況では、宿題の話題は減少した。	不登校や登校しぶりが増え、これまでの自身の子育てに不全感を抱きやすい。子ども同士のコミュニケーションが複雑になってくる年代であるため、 <b>子ども自身が集団の中で適応できるための生活習慣や社会性を最低限身に付けてほしい</b> という切実な願いを持っている。一方で、子どもができることにまで干渉してしまう傾向がみられた。	子どもが社会に出てやっていけるのかという不安が顕在化しやすい。思春期特有の精神面の不安定さに加えて、学業成績で評価にさらされる、不登校の長期化、などの影響で、親子間のコミュニケーションが減少したり、高圧的で指示的な会話が見られた。 <b>持ち物や時間の管理能力が求められることとなり、親がどの程度介入すべきか迷う姿</b> がみられた。
ニーズ	「親として子どもを受け止めたい」 「上手く関わりたい」	「子どもを理解できるようになりたい」 「子どもを支えられる親になりたい」	「子どもの気持ちを知りたい」 「子との関係を改善したい」	「思春期に応じたかわり方を学びたい」
話題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>日常生活動作</b>：身の自立にむけ、トイレ・着替え・食事など、できない事を出来るよう教えていく関わりが主となる。</li> <li>・<b>生活習慣</b>：起床や就寝、一連の流れ（登園準備、帰宅後、入浴、等）がスムーズにいかない話題が頻発。ゲームや動画の止めさせ方や家庭内でのルールの話も多い。</li> <li>・地域参加：スーパーや公園、電車など、公共の場での振る舞いに関する話題も出る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校：子どもに<b>宿題</b>をやらせる為の関わりに苦悩しており、宿題に関する話題が目立つ。</li> <li>・家族関係：参加者のパートナーに関する話題もあがり、PTに参加して変わりつつある自分と変わらないパートナーとの関係性が出やすい。</li> <li>・<b>生活習慣</b>：起床や就寝、一連の流れ（登校準備、帰宅後、入浴、食事、等）がスムーズにいかない話題が頻発。ゲームや動画の止めさせ方や家庭内でのルールの話も多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校：学習に関する工夫が話題に出る。<b>不登校</b>や登校渋りに関する話題が増える。</li> <li>・家族関係：母子関係を表す話題が増える。</li> <li>・<b>自己管理</b>：身だしなみや時間管理（家を出る時間に間に合わない等）に関する話題がでる。</li> <li>・地域参加：一人や友人との外出が増え、バスや電車での移動、門限が話題に上がる。</li> <li>・<b>意思決定/問題解決</b>：子ども自身が周囲に自分の意思を伝えたり、問題を解決する事に関する話題が増える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校：<b>不登校の長期化</b>、定期テストや課題提出に関する話題が目立つ。</li> <li>・家族関係：親への反抗的な態度や、部屋に籠る、暴言等、<b>思春期特有の問題</b>がでてくる。</li> <li>・<b>自己管理</b>：持ち物や提出物の管理、定期テストや提出物に向けた計画に関する話題が増える。</li> <li>・<b>意思決定/問題解決</b>：親の制限を減らし、子どもに任せる事柄が増えた。</li> <li>・<b>進路</b>：進路の選択、子どもの高校に関する態度、学校見学や面接等。</li> </ul>

	幼児	低学年（小1～3年）	高学年（小4～6年）	中学校（中1～3年）
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ピアサポートを得たり、ファシリテーターから安心感を得る」→「養育行動が変化する」→「子どもの行動や親子の関係性が変化する」という流れで効果が表れた。</li> <li>・日々の生活の維持で精一杯な状況では、「養育行動の変化→子どもや親子の関係性の変化」より、参加者の安心感の醸成やピアサポートを得ることが主となる傾向があった。</li> </ul>			
PT効果	落ち着いて客観的に子どもをみれるようになり、感情的に巻き込まれない対応ができるようになった。	子どもへの肯定的な理解と対応をとれるようになるが、「保護者自身が子への関わり方を変えたいという希望を持っている」参加者の効果が早く現れ、「子どもの行動が変わってほしいという期待が強い」参加者は効果が遅れて現れた。	子どもの精神的な成長に伴い、子どもの意思や自主性を育む姿勢が見出された。しかし、保護者が「こうあるべき」と期待する子ども像を求める気持ちが強いと、子どもの行動上の「できた/できない」に注目がいき、子の内面にまで関心が及ばない傾向があった。	子どもとの適切な心理的距離を模索し、子どもの意思を尊重するようになった。将来の不安を抱えながらも、今できることに取り組む意欲がでた。子の意思を尊重しつつ、苦手な所をサポートする姿勢が見られるようになった。
ファシリテーターに求められる視点	親としての自信を回復する	親が対応を変える必要性を認識する	子どもの自主性を育む	子どもの意思を尊重する

### 【ファシリテーターに求められる視点】

幼児・低学年は、親主導で子どもに関わる機会が多く、子どもが比較的素直に従う年代であり、PTで出てくる話題も家庭内で取り組みやすい話題である。幼児期には「親としての自信を回復する」ために、受容的でピアサポートの効果が強まるようなファシリテーション、低学年には「親が対応を変える必要性を認識する」ために、家庭での実践を促して親の変化に肯定的注目をするファシリテーションを心がけると効果的だろう。

高学年・中学校は、親の関与を徐々に減らして子ども主体に移行していく年代となり、PTで出てくる話題は、学校を中心とした社会との関わりの中で子ども自身が取り組む課題が増えてくる。地域のリソースの活用や、外部連携の視点を持ち、親がコーディネーターの役割を担うことも検討したい。あわせて、「子どもの自主性を育む」「子どもの意思を尊重する」ために、親子の対話を促進させるようなファシリテーションのあり方を検討することが必要となる。

PTの効果が限定的であったり、PTで解決できない問題を抱えている参加者へのフォロー体制として、PT終了後の継続的な相談や、専門家へのリファーも求められる。

## 2. 地域でのファシリテーター養成のための体制構築

### 【ファシリテーター養成講座の実施】

- ・日時 : 令和6年9月12、13日 10:00～16:00
- ・場所 : 新大阪丸ビル別館
- ・講師 : 森千夏先生 (筑波大学 ヒューマンエンパワメント推進局 助教)
- ・参加者 : 14人  
大阪市内で発達障がい児支援に携わっている児童発達支援センター・児童発達支援・放課後等デイサービスの職員で、支援経験5年以上の方

### 【PT見学】

- ・見学者 : 令和6年度ファシリテーター養成講座受講者で、見学を希望する4名
- ・見学するグループ : 当センター主催の幼児グループ(基本プラットフォームを応用したプログラムを使用)
- ・感想

- ・ファシリテーターの相づちや褒め方、保護者同志で褒め合える場づくり等で、グループの雰囲気づくりをする大切さがわかった。
- ・家族支援のニーズはあるので、まずは単発の講座をしてPTにつなげたいが、事業所内にPTをする仲間が必要。
- ・養成講座で知り合った人の事業所で座談会の見学をさせてもらう等、支援者同志の繋がりができた。
- ・PTを職員への指導にも使う等、事業所内の人材育成にも役立てたい。
- ・PT実施する際に、困ったことがあれば助けてほしい。

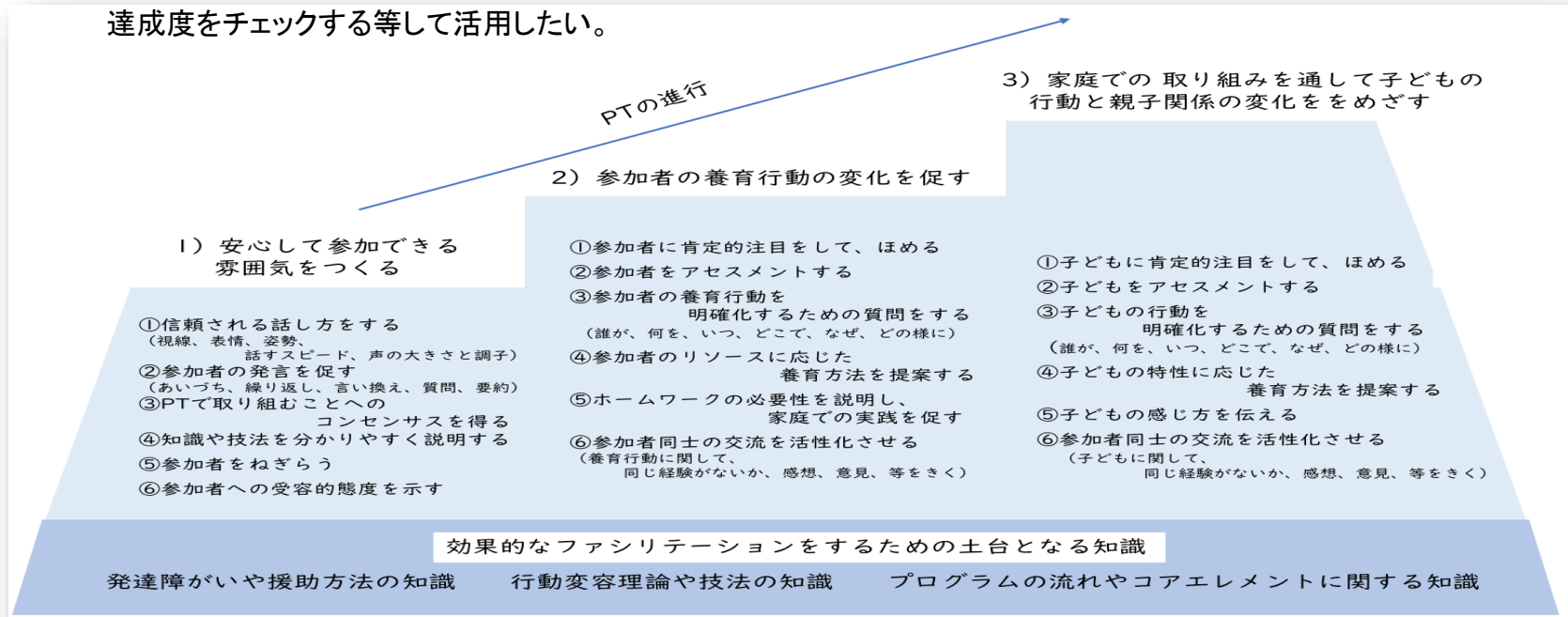
### 【スーパーバイズ・コンサルテーション】

- ・対象 : 令和5年度養成講座受講者が運営する子育て広場で実施するPT(令和6年3月～令和6年8月)。
- ・方法 : 当センター作成の幼児版プログラムの提供  
PT準備～実施期間を通して、質問や相談への対応  
3回目に参加し、セッション内で補足説明や、セッション後のスーパーバイズを実施
- ・感想

- ・スタッフのスキルアップにつながり、保護者さんへの助言の幅が広がった。
- ・気になる保護者がいるときに、PTを案内できる安心感がある。助言や話を聞くだけでは難しい保護者さんへアプローチできる。
- ・PT実施の際の疑問点など質問・相談できたり、現場を見てもらって振り返りの時間をもてることが、有難かった。

【日本発達障害学会第59回研究大会 ポスター発表】

- ・開催日 : 令和6年10月5、6日
- ・題 : 「ペアレント・トレーニングのファシリテーター養成の試みーファシリテーターの行動指針と具体的行動リストの作成ー」
- ・目的 : ファシリテーターの養成には、養成講座だけでなくSVも必要とされるが、「ペアレント・トレーニング実践ガイドブック」「ペアレント・トレーニング支援者用マニュアル」には、SVのあり方は明記されていない。ファシリテーターの行動指針と具体的行動リストを作成することで、経験の浅いファシリテーターのガイドとして活用し、また、SVの際に行動リストの達成度をチェックする等して活用したい。



PTの進行にともなうファシリテーターの行動モデル

【課題】

養成講座を受講した後に、実際のPTセッションの見学、PTを自施設で実施する際のSVとコンサルテーションといった、地域でファシリテーターを養成するための体制構築に取り組んだ。しかし、職員体制の問題や、自施設にあった実施方法の工夫の必要性などの課題があることから、今後は、養成体制を継続するとともに、PTを導入しやすくなるようなサポートや、PTの勉強会や連絡会のような継続的にファシリテーターを支援できる仕組みの構築も必要である。また、SVの実施データを蓄積し、そこで得た知見を養成体制の充実のために活用する等して、効果的なファシリテーター養成につなげたい。